
首人間の集い

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首人間の集い

【Nコード】

N04610

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

森でカップルが迷い込んだ、その場所は・・・上司からクビにされ、本当に首になってしまった人々の集まりであった・・・

とあるオフィスにて。真田という社員が上司に詰られていた。

「いったいどういう事だ！真田くん！君のミスのせいで、経営ががた落ちだっ！」

「すみません！」

「すみませんで済むと思うのか！」

「…この責任は…必ず取ります…」

「その通りだ。必ず責任を取ってもらおう。君はクビだ！」

「…え？」

「そうだ！君はクビだ！」

しゅぽーん。真田の首は胴体からまるでコルクを抜くように勢いよく飛び出した。体はそのまま仰向けに倒れた。首はぼんと床を跳ね、着地した。首は立ち上がり、ため息をついた。

「あーあ…クビになっちゃった…」

そしてとことこ歩いてオフィスを出た。

場所は変わって、夜の森の中。二人、男女がデートという事で探検していたのだが、すっかり迷ってしまい、今や迷子。あるう事が二人は携帯を忘れてしまい、絶体絶命。女性の奈穂子は男性の達志に叫んだ。

「なんで、ここに行こうと思ったのよ！」

「スリルがあるかな…と思って…」

「こんなスリルいらないわ！ネズミーランドがいいってあれだけ言っただのに！」

「しょうがないだろ。あれだけ混んでたんだから。」

「携帯ぐらい持っていつてよ！」

「菜穂ちゃんだって持ってきてよ！」

「私のせいにするの!？」

「さてよ！言い争わないで解決法を考えよう！」

そして二人はしばらく黙り、とりあえず前進した。

菜穂子は言った。

「ねえ：食べ物とかないの。」

「ないよ。もう全部食べきっちゃった。」

「もうどうするのよお、飢え死にするわあ、来世を呪ってやるうう」

「静かに！」

「何よ！」

「静かにして！何か：いる…」

見回すと、どこかに灯りが漏れている事に気づいた。

「：何かしら。宿？」

「灯りがあるという事は人がいるのだな。」

「どうする？達っちゃん。」

「：進んでみよう。」

草葉を分けて二人は灯りの方へ直進した。やがて彼らは木々を抜けた。

だがそこは宿ではなかった。広場であった。

「なんだここは…」

と達志が呟いたその時。

「くーび、くーび、僕らはくーび、くーびにさーれた首人間」

不気味な歌声と共に、周りから沢山首が歩いてきた。二人は悲鳴をあげた。

「きあああああ」

「く…首人間だ！」

二人は恐怖のあまり、足がすくんだ。一人の首が言った。

「こいつらは誰だ…」

「新入りか？」

「首が繋がっている。」

「じゃあ違うのか。」

「迷いこんだのだろう…可哀想に…」

二人は叫んだ。

「お願いです！私達を首にしないでください！」
すると首人間たちは答えた。

「私達にはその力はない…権限もない…」

「首にできるのは権威者だけ。上司だけ。」

「私達は失業者。」

「失業者。」

そして首人間たちは「はあ…」とため息をついた。

菜穂子は哀れに思ってしまった。

「可哀想に…何とかならないのかしら。」

「つながる方法はある。」

背後から声が聞こえてきた。

「仕事を発見すれば首が繋がる。そうだ。」

一人の人間が現れた。達志は訊ねた。

「あなたは…」

「首人間の長、首首男だ。」

「しかしあなたは首が繋がっているではありませんか。」

「そうだ。昔は首だけだったが…」

首男は回想する。そう、彼らのためにハローワークを臨時に作った。
だが、その時。

“違う、そのつもりはない、やめろ、やめろー！”

背後から首のない胴体が現れ、必死に抵抗する首をひろって、胴体

に繋げた。

「…そういう事があつたんだよ。」

「そうなの…可哀想に…」

「この集いはその集いだよ。」

しばらくして、一首の首が叫んだ。

「やったー、仕事が見つかったー！」

「え！おめでとう！」

「おめでとう！」

「体はいつ来るの？」

「もうすぐじゃないかなあ。」

そのとき、しゃしゃしゃと何かが草を掻き分ける音とが聞こえた。

達志と菜穂子は言った。

「何かしら…」

「さあ…」

その時二人の背後から首なし人間が現れ、衝突した。なにせ30才の体なのでその衝撃は大きく二人は前のめりで倒れた。首なし人間はつまずいて二人の上に倒れた。

「あいたたたたた…」

二人はそれを振り払いながら起き上がった。

その時、首なし人間が立ち上がった。

ほのぼのするホラー。

注：この話は爽やかなグロが描かれています。あくまで爽やかで、汚くはないですが、でも苦手な方はブラウザバック推奨。

）

とあるオフィスにて。真田という社員が上司に詰られていた。

「いったいどういう事だ！真田くん！君のミスのせいで、経営ががた落ちだっ！」

「すみません！」

「すみませんで済むと思うのか！」

「…この責任は…必ず取ります…」

「その通りだ。必ず責任を取ってもらおう。君はクビだ！」

「…え？」

「そうだ！君はクビだ！」

しゅぽーん。真田の首は胴体からまるでコルクを抜くように勢いよく飛び出した。体はそのまま仰向けに倒れた。首はほんと床を跳ね、着地した。首は立ち上がり、ため息をついた。

「あーあ…クビになっちゃった…」

そしてとことこ歩いてオフィスを出た。

場所は変わって、夜の森の中。二人、男女がデートという事で探検していたのだが、すっかり迷ってしまい、今や迷子。あるう事が二人は携帯を忘れてしまい、絶体絶命。女性の奈穂子は男性の達志に叫んだ。

「なんで、ここに行こうと思ったのよ！」

「スリルがあるかな…と思って…」

「こんなスリルいらないわ！ネズミーランドがいいってあれだけ言っただのに！」

「しょうがないだろ。あれだけ混んでたんだから。」

「携帯ぐらい持って行ってよ！」

「菜穂ちゃんだって持ってきてよ！」

「私のせいにするの!？」

「さてよ!言い争わないで解決法を考えよう!」

そして二人はしばらく黙り、とりあえず前進した。

菜穂子は言った。

「ねえ…食べ物とかないの。」

「ないよ。もう全部食べきっちゃった。」

「もうどうするのよお、飢え死にするわあ、来世を呪ってやるうう」

「静かに!」

「何よ!」

「静かにして!何か…いる…」

見回すと、どこかに灯りが漏れている事に気づいた。

「…何かしら。宿?」

「灯りがあるという事は人がいるのだな。」

「どうする?達っちゃん。」

「…進んでみよう。」

草葉を分けて二人は灯りの方へ直進した。やがて彼らは木々を抜けた。

だがそこは宿ではなかった。広場であった。

「なんだここは…」

と達志が呟いたその時。

「くーび、くーび、僕らはくーび、くーびにさーれた首人間」

不気味な歌声と共に、周りから沢山首が歩いてきた。二人は悲鳴をあげた。

「きあああああ」

「く…首人間だ!」

二人は恐怖のあまり、足がすくんだ。一人の首が言った。

「こいつらは誰だ…」

「新入りか？」

「首が繋がっている。」

「じゃあ違うのか。」

「迷いこんだのだろう…可哀想に…」

二人は叫んだ。

「お願いです！私達を首にしないでください！」
すると首人間たちは答えた。

「私達にはその力はない…権限もない…」

「首にできるのは権威者だけ。上司だけ。」

「私達は失業者。」

「失業者。」

そして首人間たちは「はあ…」とため息をついた。

菜穂子は哀れに思っ言つた。

「可哀想に…何とかならないのかしら。」

「つながる方法はある。」

背後から声が聞こえてきた。

「仕事を発見すれば首が繋がる。そうだ。」

一人の人間が現れた。達志は訊ねた。

「あなたは…」

「首人間の長、首首男だ。」

「しかしあなたは首が繋がっているではありませんか。」

「そうだ。昔は首だけだったが…」

首男は回想する。そう、彼らのためにハローワークを臨時に作った。
だが、その時。

“違う、そのつもりはない、やめろ、やめろー！”

背後から首のない胴体が現れ、必死に抵抗する首をひろって、胴体
に繋げた。

「…そういう事があつたんだよ。」

「そつなの…可哀想に…」

だが、木の根に躓いた。

「ぐひっ」

背後に影を感じた。そう。達志だ。両手を伸ばして、菜穂子の首を掴んだ。

その時、達志の体はなぎ倒された。背後から、40代の達志が倒したのだ。達志は言った。

「お前にくれてやるのは菜穂子じゃねえ、俺の首だ。」

達志の体は達志の首を40代の体から引っこ抜いた。そして、達志はもとにもどった。残った体は、また首を捜し求めて走り去った。

「危ないところだったね。」

「・・・う・・・ありがとう・・・」

「あれ？なんか光りが見える。」

「また集いじゃないの。」

「いや、ちがう。ほら。」

見ると、なんと街の灯りではないか。そうだ。逃げているうちに森の端まで行ったのだ。こうして彼らは無事森から出ることが出来た。

「やったー！」

「こうなったのも首人間のおかげかもね。」

「そうだね。」

二人は森に向かって叫んだ。

「ありがとう！首人間！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0461o/>

首人間の集い

2010年10月10日19時00分発行